

大相撲雑感

紹介者



出原 洋三氏

日本板硝子 取締役会長



高橋 温氏

住友信託銀行 取締役会長



次回は

鈴木 正一郎氏

(王子製紙 取締役会長)
にご登場いただきます。

私が大相撲に興味をもったのは、小学校の高学年、昭和20年代の後半である。少年期は岩手で過ごしたので、本場所を見る機会はなく、ラジオ、少年雑誌、ニュース映画などで接したわけである。今特にひいきにしている力士はいないが、何故か離れ難い。本場所中、退社時間がフリーの場合、5時半に帰りの車に乗り込む。結び前の数番と今日の結果をラジオで聞くためである。

小、中、高校を通じて栃錦の熱烈なファンであった。昭和35年に栃錦が引退して後は、取り組み前に心配で胸がドキドキするという思いはしていない。大関時代の栃錦を、盛岡巡業の時に間近に見たが、小兵ながら精悍な土俵姿は美しかった。大相撲で「この一番は」と問われれば、躊躇なく昭和27年秋場所（当時は年4場所制）13日目、大関吉葉山対関脇栃錦戦をあげる。この場所、結局栃錦が14勝1敗で優勝し翌場所大関に昇進するのであるが、事実上の優勝決定戦と言われたこの一番、両者がっぷり四つとなり激しい攻防の後、栃錦が「二枚蹴り」の大技一閃、吉葉山を土俵中央に屠ったのである。

近時、力士の大型化が顕著であり、外国人力士の台頭がそれに拍車をかけている。そのせい、決まり手もほとんどが、押

し、寄りと引き、はたき、である。全体に相撲が単調でつまらない。様々な要因があるとは思いますが、一部から既に指摘されている如く、力士の体格に比して、土俵が狭いのである。体が大きいので、立ち合いから既に「後がない」、パワーのある大型力士にかかれば、立ち合い一発で勝負が決してしまい易いのは単純な道理である。横に動く「ヒマ」がないので単調な相撲が多くなる。このままだと「業師」大関の出現はまず無理である。

土俵が今の広さ、直径15尺（4.55m）に定められたのは昭和6年のことで、それまでは13尺（3.94m）であった。この措置は、日本人の体格の向上に合わせたものとして伝えられており、当時相撲協会は「相撲独特の瞬間的な勝負の醍醐味を少しでも長く見てもらうため」と、広くした理由を公表している。

大相撲の魅力は、伝統が産み出す様式美にあることは言を俟たない。しかし、歴史を辿れば、決して**ばんこふえき**（ばんこふえき）でなく、時代の潮流を誤りなくとり入れて、国技としての面目を保ち、興行としても稀に見る長寿である。仕切り制限時間、四本柱の廃止、部屋別総当たり制、などである。

土俵の広さは難しいテーマではあるが、協会は改革に向かう方向性なり論点を公開すべきである。